

論文・提言

中東と日本の平和主義を考えるーラフィーク・シャーミーの作品をてがかりにして

(初出『詩人会議』2017年3月号)

長沢栄治 (東京大学名誉教授)

〔平和主義の危機〕

現在の日本は、戦後平和主義の危機に直面している。一年前の2015年9月、多くの人々の反対を押し切る形で、集団自衛権の行使を認める安保法案が強行採決された。その後、戦争放棄を謳った平和憲法の改正が現実の動きとなっている。

一方、中東という地域ほど平和主義が切実に希求され、必要とされている地域は他にない。このことについて、毎日、テレビや新聞でニュースを見ている読者の皆さんに多くの説明は要らないだろう。このように「平和主義」からもっとも縁遠いと見えた地域に、6年前の2011年1月、一筋の希望の光が射した。非暴力運動として始まったアラブの民衆蜂起、アラブ革命である。この運動は、新しい平和主義の芽生えを示すかと期待された。事実、革命エジプトのタハリール広場には、ガンジーの非暴力主義の解説本を読みふける若者たちの姿があった。治安部隊の暴力や狙撃手の銃弾を恐れない彼らのデモの隊列からは、平和主義（スィルミーヤ）のスローガンが声高く叫ばれた。

しかし、旧体制権力による容赦ない弾圧や、外国からの軍事介入、イスラーム過激派の抬頭、そして宗派對立の扇動によって、アラブ革命は暗転した。シリアでは「小さなガンジー」と呼ばれたある青年が、治安部隊の兵士に花やペットボトルの水を配って平和な解決を訴えていたが、逮捕されて拷問を受けた後で殺害された。2011年9月のことである。こうした政府の苛烈な弾圧に耐え切れず、平和な抗議運動は、いつしか武装闘争に変化した。そして、こうした武力衝突につけこむ形で、サウジアラビアなどの産油国や一部の欧米諸国が支援するイスラーム過激派の戦闘員が流入し、シリア内戦は収拾のつかない事態に発展した。そしてこの内戦は大量の難民を生み、さらに台頭したIS（「イスラーム国」を名乗る過激派）の残虐行為は世界を震撼させた。

さて、注目したいのは、以上に述べた日本と中東の二つの平和主義の危機が、根底で結びついていることである。日本の安全保障政策は、イラク・イラン戦争（1980—88年）以来、中東情勢の影響を受けて変更されてきた。その大きな画期となったのが、湾岸戦争（1991年）であり、イラク戦争（2003年）であった。これら中東での戦乱は、日本の安保政策の変更の口実に使われてきた（以上については、長沢栄治・栗田禎子編『中東と日本の針路ー「安保法制」がもたらすもの』（大月書店、2016年）を参照）。最近、注目を集めた南スーダンへの自衛隊派遣と「駆けつけ警護」容認の問題も、同じように日本を「戦争ができ

る国」にするための口実に使われている。

日本の平和主義を守り、発展させるためには、日本一国だけのことを考えていてはならない。中東の平和主義の将来は、日本の平和主義の再生にもつながっている。そのために私たち市民にできることとは何か、このことについて考えてみたい。

〔文学の力、詩の力〕

上述の問題を考えるために、ぜひ読んでほしいのが、岡真理『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房、2008年）という本である。同書の第一章「小説、この無能なものたち」の中で、岡はパレスチナ問題を根底に置く世界の不正に対し、文学はいったい何ができるのか、と自らに問いかける。「パレスチナでパレスチナ人が虫けらのように殺されているとき、文学は何ができるのか」。

この自らへの問いかけに対し、彼女が見いだしたのは次のような答えであった。「文学は、人間がこのような不条理な状況にあってもなお、人間として正気を保つために、言い換えれば人間が人間としてあるために存在するということ」なのではないか。文学は、人間を支える。人間の存在を、その尊厳を支え、人を励ますものである。

本稿のテーマに引きつけた問いかけをするなら、人間のための文学は、平和主義に対しどのような力を持っているか、である。このような問題意識から、日本と中東の平和主義を結ぶものを考えるために、まず紹介したい作品がある。イラク戦争後に刊行された岡野弘彦『歌集 バグダッド燃ゆ』（砂子屋書房、2006年）である。同歌集に収録された短歌をいくつか見てみよう。

桜の花 ちるをあはれと果てゆきて 少年の友おほよそは亡し
焼けこげて 桜の下にならび臥す 骸^{むくろ}のほふまでを見とげつ
ほろびゆく炎^{ほな}中の桜 見てしより、われの心の修羅 静まらず
かかる世に替へし われらの命かと 老いざる死者の声 怨みいふ

歌人は、イラク戦争の劫火の中に、先の大戦で若くして亡くなった戦友たちの姿を認め、またその声を聞いている。

十字軍をわれらたたかふと 言ひ放つ 大統領を許すまじとす
ひらひらと手をふりて笑ふ大統領。そのひと振りに 人多く死す
国敗れて 身をゆだねたるアメリカに いつまで添ひて 世を狭めゆく

これらの歌からは、現在の日本や世界に対する歌人の厳しい眼差しが感じ取れる。また、ここでは紹介できないが、歌集には、明治の廃仏毀釈の跡をたどる深い思いの歌と、イスラームなど宗教の名を借りた現代の暴力を悲しむ歌が並んで収録され、宗教的な心象風景の不思議な交錯を見せている。

この歌集によって歌人は、第29回現代短歌大賞および第22回詩歌文学館賞を受賞した。後者の受賞の言葉で、歌人は次のように語っている。「世襲の神主の家に生まれ、戦中派として戦を体験し、古代学者折口信夫に教を受けたことが、私の学問と文学のあり方を定め

ました。古代から、戦によって生じる不幸な未完成霊の鎮めを歌った和歌の伝統が、今回のイラク戦争によって新しい刺戟を受けて、私の胸の中で作品となって燃えあがりました。思えばそれも、師の晩年の歌集『倭をぐな』の歎きの継承であります」。

同歌集には、近代日本の詩作における反戦主義というひとつの伝統が、脈々と流れているともいえる。筆者のような詩作の門外漢にも、この反戦主義の伝統が、近代以降においては与謝野晶子の有名な詩「君死にたまふことなかれ—旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて」以来のものであることくらいは知っている。ただし、詩人はとくに大戦中、戦争賛美へと変節したという批判を受けている。にもかかわらず、である。どのように詩人が変節しようとも、いったん生まれた詩は、独自の生命力を持っている。安保法制に反対する国会前のデモ隊の中に「君、人を殺めたまふことなかれ」と詩の一節を少し変えた言葉を大きな布に書いていた人がいた。

『東京新聞』が毎日一面に連載している「平和の俳句」コーナーや、同じく沖縄の県紙『琉球新報』の「平和のうた」（日曜日一面、沖縄の短詩「琉歌」などを収録）といったように、庶民が平和主義の歌を日々、作り、伝えあい、小さな声を積み重ねている。本誌『詩人会議』が、こうした流れの中で重要な役割を果たして来たことは言うまでもない。

〔兵役忌避と男性性（マチスモ）〕

それでは中東の文学や詩歌における反戦の伝統は、どのような形をとっているのだろうか。残念ながら、筆者はアラブ文学・中東文学の専門家ではないので、この問いにほとんど答えることができない。ただ、それを知る手がかりとして、本誌の1月号で紹介した作家ラフィーク・シャーミー（邦訳ではラフィク・シャミ）の作品を例に挙げて議論をしてみたいと思う。

ラフィーク・シャーミーは、ドイツで活躍するシリア出身の作家である。彼のように、最近のヨーロッパでは、移民や外国人の作家の活躍が目立つ。昨年2016年に、多和田葉子がドイツの高名な文学賞「クライスト賞」を受賞したことは、日本でもよく知られている。同じく昨年のフランスでは、モロッコ出身のレイラ・スリーマニーという女性作家が『甘い歌』という作品で「ゴンクール賞」を受賞したと聞く。ドイツ語やフランス語で書かれたこれらの文学は、ドイツ文学・フランス文学であるが、しかし同時に、アラブ（中東）文学であり、日本（東アジア）文学であるとはいえないだろうか。

さて、シャーミーの作品の中で何回か出てくるのが、兵役忌避をめぐるテーマである。『蠅の乳しぼり』（西村書店、1995年）に所収された表題作の短編「蠅の乳しぼり」は、彼の作品によく登場するサリム叔父さんの思い出話である。サリム（アラビア語の人名としては、サリームあるいはサーリム）叔父さんは、作家の代表作『夜の語り部』（西村書店、1996年）では、主人公を演じている。「蠅の乳しぼり」の中で叔父さんは、耳の聞こえない振りをして兵役を逃れようと試みる。何回かのひっかけの質問をかわすのだが、最後に将校の奸計にはまる、という話である。ここには、庶民の素朴な戦争忌避の感情が示されている。

外の世界から見たら、中東はいつも戦争に明け暮れているように見えるのが気の毒だが、この地域の人たちがとくに戦好き、喧嘩好きなわけではない。どの地域の人々と同じだが、戦争や兵役は、多くの人にとり毛嫌いすべきものであった。たとえば、エジプトは、ヨーロッパ以外では最初に徴兵制が導入された国だが（日本より 50 年も早い）、兵役逃れのために、農民が自らの体を損傷させたという話がある。エジプトには優れた農村小説があるが、当然ながら、兵役に対する忌避の話も取り上げられている。農村小説の名手、ユースフ・カイードの『エジプト領内の戦争』（1978 年、未邦訳）である。舞台の設定は、日本では石油危機が起きたことで知られる第四次中東戦争（1973 年 10 月）直後のナイルデルタの村。村長の息子の戦死が伝えられるが、実は亡くなったのは、村長の圧力で身代わりに徴兵された村の番卒（ガフィール）の息子であったという話である。村長の恣意的な支配下にある村社会を題材に、エジプトという国全体にはびこる権威主義と不正を暴いた作品であった。この戦争では、エジプトの多数の兵士が命を落とした。当時のサダト大統領は、この戦争の後、1977 年の突然のエルサレム訪問によって世界を驚かせた。大統領がイスラエルとの和平を強行することができたのは、多くの国民が当時、感じていた厭戦気分を利用したものである。

さて、シャーミーの作品に戻ろう。この兵役拒否のテーマは、作家自身の経験に根ざしている。作家は、徴兵を逃れるために隣国のレバノンからドイツへと半ば亡命する形で移住したという。大河小説『愛の裏側は闇』第 3 巻（東京創元社、2014 年）には、主人公が収監された政治囚監獄で出会った兵役拒否者の「ナージ」という男の話が出てくる。この監獄で「もっともひどい目に逢ったのが兵役拒否者と脱走兵」であり、彼らは「手ひどい拷問」を受けた。しかも、兵役拒否者は獄中で、他の多くの囚人からも軽蔑されていた。この点で共産黨員もムスリム同胞団員も「イデオロギーの違いは天地の差ほどあった」が「暴力を支持する点では一致」していた（246 頁）。結局のところ、ナージは、拷問の末に殺されていく。この小説のコンテンツは、作家が聞いた多くの証言や体験談から成り立っているというから、この兵役拒否者に関する記述は実話であろう。

この話が巧まずして示すのは、抑圧体制の変革を求める左翼・右翼の政治活動家自身が、思想は違っても、国家が作り上げた兵役制度そのものに何の疑問も感じてはいない、ということだ。おそらく、彼らはこうした徴兵を強いるような国家権力をそのままの形で奪取しようと考えているのだろう。そして、そのためには暴力に訴えることも厭わない勢力もいたのだ。このように徴兵忌避者をあざ笑い、忌まわしく思う考え方が、シリア内戦だけではなく、他の地域において多くの戦乱が起きる背景にあるのではないか。そのように思えるのである。

もちろん、世界のほとんどの地域には、それぞれの好戦的な文化、いわゆる「尚武の文化」がある。現在の日本でも、サッカーや野球などで「侍ジャパン」という言葉がもてはやされている。負けた選手たちは、意気地なしとか、弱虫とか言って非難を受ける。それがスポーツの世界に留まるならあまり害はないのかもしれない。しかし、「男らしくない」

とか、「男の腐ったような」とかいう非難や軽蔑の言葉が大手を振ってまかり通るとき、この「男性性（マチスモ）」は知らないうちに国家によって利用される。このように平和主義を考える場合にまず突き当たるのが、「男らしさ」という言葉に託される「勇気」の問題である。この非暴力主義と勇気の関係提起したのは、他ならぬガンジーであった（マハトマ・ガンディー『わたしの非暴力』（みすず書房、1997年、2巻））。彼の議論の検討は、まさに今日的な課題である。

〔平和主義と勇気〕

シャーミーの小説に出てくる「ナージ」は、男らしくないと馬鹿にされるが、しかし命懸けで、勇気をもって兵役を忌避しているのである。真の勇気とは何であろう。その意味で本稿の冒頭で紹介したアラブ革命の若者たちが平和主義を訴える姿の中に、中東の未来を見いだしたいと思うのである。

シャーミーには、こうした真の勇気を示す主人公が登場する作品がある。とくに『空飛ぶ木』（西村書店、1997年）には、珠玉の短編が収録されている。その一つ「黒い羊」という小説は、白い毛の仲間たちから仲間はずれにされている黒毛の羊の娘の話である。娘の父の羊は、同じく黒毛であったため群れの皆から嫌われていた。鋭い角を持っていた父だが、嫌がらせをする相手との争い事は好まなかった。しかし、父は黒毛だったために殺され、鍋で煮られて食べられてしまったという。そんな噂を耳にしながらも、娘の羊はたった独りで勇気をもってオオカミに立ち向かっていくのだった。黒毛羊の父は、キリスト教徒か、ユダヤ教徒か、あるいはイスラームの少数宗派かは分からないが、人間社会のマイノリティの象徴であろう。マイノリティの父は、どんな嫌がらせにも負けず勇気をもって非暴力を貫いたのだった。生前の父を知らない娘も、その勇気を受け継いでいるのである。

もう一つの作品「監視人」で描かれるのは、全体主義体制の蟻社会である。もちろん、人間社会のパロディーであるが、それはかつての東欧や中東の社会主義国家とは限らない。「自由な」西側資本主義の闇にも通じた社会である。この社会で蟻たちに強制労働させる口実に使われるのは、人（蟻）身御供を求める怪物の存在であった。この怪物の正体を突き止め、闘うために立ち上がるのは、若い娘の蟻、サリーであった。さて、以上の二つの話で登場する羊と蟻の主人公が、いずれも若い女の子である点が重要である。勇気に対する作家の考え方がよく示されている。考えてみれば、アラビアンナイトの昔から、勇気と知恵の持ち主は女性であった。

〔平和主義と正義〕

中東における兵役忌避の問題を考えると、イスラエルの兵士たちの勇気ある行動について触れないわけにはいかない。ペレツ・キドロロ『イスラエル兵役拒否者からの手紙』（NHK出版、2003年）には、こうした兵士からの手紙や声明文が収録されている。最初の手紙には、次のように書かれている。「私はイスラエル軍の実戦士官として、西岸地区およ

びガザでの軍務に服してきた。私は世の中がどんなものかを知っているつもりだ。生き残るために人を殺さなければならないときもある。イスラエル国家のために、私は石を投げた子どもたちを追いかけた。難民キャンプの路地をパトロールした。真夜中、粗末なドアをばんばんとたたいた。政治ビラを見つけるために、マットレスの中をさぐった。赤ん坊が泣きさけぶのを聞いた。人々をベッドから引きずりだして、壁に書かれたスローガンを消すように命令した。〈中略〉私たちは百を超える入植地を作ってきた。20万人の入植者を送り出した。私たちは兵士を、子どもを、母親を亡くした。すべては国家防衛のためだった。すべては平和のためだった。新たな自爆者を出さないためだった。35年間私たちの頭上には黒旗〔パレスチナ人に対する不正の象徴。1957年のイスラエル軍による虐殺事件で判事が口にした「不法の黒い旗」という言葉に由来〕がひるがえっていたのに、だれもそれを見ようとしはしなかった。もうたくさんだ(2002年3月)。彼らは戦争や占領行為そのものの不正、「黒い旗」に気づいて兵役を拒否した人々である。土井敏邦の『沈黙を破る—元イスラエル軍将兵が語る“占領”』(岩波書店、2008年)および同名の記録映画(DVD)はこうした占領政策を批判する兵士たちを取材したルポルタージュである。

手紙の中で兵士が語るように、戦争や占領もすべては「平和のため」であった。しかし、この兵士が気づいたように、このイスラエルによるパレスチナの占領や入植地拡大、あるいはレバノンやガザ地区に対する「自衛のための」戦争は、パレスチナ問題の根幹をなす不正、「黒い旗」そのものであったのだ。

平和主義とは何か。真の平和とは、人々の頭越しで行なわれる和平交渉によって、戦火が消え、表面的な平静や安定がもたらされることではない。真の平和は、不正を正すことによってしか実現しない。

[平和問題の「本丸」、パレスチナ問題]

シャーミーは、このパレスチナ問題をどのように扱っているのだろうか。『愛の裏側は闇』第3巻に次のようなシーンがある。主人公がイスラエルとの国境近くの学校に教師として赴任していく旅の情景である。旅の途中で「うらぶれたダラー」という田舎町を過ぎる。そこでは農民の子どもたちが、裸足でバスを追いかけ、石を投げつけてくるのだが、パンツもはいていない。それほどに貧しい。「パレスチナ人難民の子どもたちですら、粉や米を難民キャンプに運ぶために使った白い南京袋で下穿きを仕立ててもらってはいるというのに」。そこでは寄付をした国のスタンプがそのまま下穿きの柄になっている。「アメリカの握手、オーストラリアの跳ねるカンガルー、カナダのカエデの葉」といった具合に(146頁)。

実は主人公が通り過ぎた「うらぶれたダラー」とは、今回のシリア内戦のきっかけとなった南部の地方都市、ダラーである。反政府の落書きを書いた中学生が当局に捕らえられ、拷問を受けた死体として見つかったことから、人々の怒りに火がついたのだった。

小説で作家が訴えたいのは、農村の貧困問題に代表されるような国内の矛盾を抱えなが

ら、大量のパレスチナ難民を押しつけられたシリアという国で、パレスチナの解放やアラブの大義を建前に掲げる抑圧的な体制が作られたことである。

現在のシリア内戦の悲劇の淵源は、パレスチナ問題にあるといえるのではないか。このことに多くの人々が触れようとはしない。どうしてこんな目に遭うのか。むしろひどい目に遭っている人自身がその理由が分からないでいる。そして、そのように仕向ける国際的な仕組みがある。この不正の仕組みを隠ぺいするために、幾重にも強力で厳重な蓋がかぶされている。そして、いわゆる専門家やメディアや政治の権力者がこの仕組みとその隠ぺいに加担しているのである。

この点で作家チャーミーは、現実を鋭く捉えながらも、しかし、こうした問題の一步手前で立ち止まっているように見える。たとえば、同じく『愛の裏側は闇』第3巻の中で、半ば絶望的な調子の意見が語られている。イスラエル、さらにアメリカに負ければ、〔第二次大戦の敗戦国の〕ドイツや日本と同じように、この国〔シリア〕を見事に作りなおしてくれるのではないかと(285頁)。この本のドイツ語での初版は、2004年であるから、イラク戦争の一年後である。この意見がイラク戦争と戦後統治への期待と関係ないとは思えない。しかし、現実には、この「期待」を大きく裏切るその後の展開が、現在のシリアの悲劇をもたらしているのではないか。

筆者は、この数年、板橋区の市民の平和を考える勉強会に参加する機会を得ている。ここで学ばせてもらうことも多い。あるご婦人から、パレスチナ問題は世界の平和の問題の「本丸」ですね、という意見をいただいた。あまたの専門家のように、たくさんの本を読まなくても、分かる人には分かるのである。あらゆる問題の隠ぺいや捻じ曲げた解釈の蓋を貫く視線をもって、中東と日本の平和主義を真剣に考える人が一人でも増えることを願っている。

[追記]

以上の初出の原稿で言及・引用した文献情報・関連情報を以下に記します(登場順)。

長沢栄治・栗田禎子編『中東と日本の針路―「安保法制」がもたらすもの』大月書店、2016

岡真理『アラブ、祈りとしての文学』みすず書房、2008

岡野弘彦『歌集 バグダッド燃ゆ』砂子屋書房、2006

釈迢空『倭をぐな』中央公論社、1955

レイラ・スリーマニー『甘い歌』(Leïla Slimani, *Chanson douce*. Paris: Éditions Gallimard, 2016)

ラフィク・シャミ [酒寄進一訳]『蠅の乳しぼり』西村書店、1995

同 [松永美穂訳]『夜の語り部』西村書店、1996

ユースフ・カイード『エジプト領内の戦争』(Yūsuf al-Qa‘īd, *al-ḥarb fī barr miṣr*. Beirut: Dār Ibn Rushd. 1978 ; 英訳 Muḥammad Yūsuf Qu‘ayd [trans. Olive E Kenny, Lorne Kenny, Christopher Tingley]. MA: Interlink Publishing. 1997; この小説は1991年に映画化された。サラールハ・アブーセイフ監督作品)

- ラフィク・シャミ [酒寄進一訳] 『愛の裏側は闇』 (3 巻) 東京創元社. 2014
- マハトマ・ガンディー [森本達夫訳] 『わたしの非暴力』 (2 巻) みすず書房. 1997
- ラフィク・シャミ [池上弘子訳] 『空飛ぶ木』 西村書店. 1997
- ペレツ・キドロシ [田中好子訳] 『イスラエル兵役拒否者からの手紙』 NHK 出版. 2003
- 土井敏邦 『沈黙を破る—元イスラエル軍将兵が語る“占領”』 岩波書店. 2008